

直接的/間接的被災経験が防災・減災にむけた準備行動へ与える影響 ～正常性バイアスとの関連性～

1732065 小宮山 洋平

指導教員：山崎治 准教授

1. はじめに

令和元年東日本台風では、日本各地で甚大な被害が発生し、多くの人が被災者となった。災害への対策として、防災・減災に向けた準備等が被災時の行動に影響することが考えられる。「逃げ遅れ」の原因の一つであると考えられる、「正常性バイアス」を乗り越えるために、災害に対する問題意識を変える必要性がある。

本研究では、自分自身における「直接的な被災経験」や、家族や友人といった「間接的な被災経験」がその後の防災・減災に向けた準備、及び「正常性バイアス」の変化に影響すると考える。

2. 目的

本研究では、主に被災経験の有無および被災経験の直接/間接の違いによる、防災・減災に向けた準備行動・準備意識への影響を調査し、正常性バイアスとの関連性について検討を行う。被災経験は自分自身における「直接的な経験」と共に、友人や知人といった人づての被災経験談といった「間接的な経験」に着目する。間接的被災経験よりも直接的被災経験において、「正常性バイアス」の影響をうけにくくなり、防災・減災に向けた準備行動が行われやすくなるという仮説に基づき調査を実施する。

3. 調査

被災経験の有無による、防災・減災に向けた準備行動・準備意識への影響を調査し、正常性バイアスとの関連性について検討した。

3.1 方法

調査参加者：本学情報科学部情報ネットワーク学科・長野県長野工業高等学校機械科（30名）

設問構成と設問項目：「被災経験および被災時の状況」では、直接的/間接的被災経験の有無および被災時における感情の強度および正常性バイアスについて質問する。「防災・減災に関する意識と知識」では、普段の生活で行っている防災・減災対策について7問、災害発生状況を設定した防災・減災対策について9問に回答してもらう。さらに、正常性バイアスに関する設問として「災害時『自分だけは大丈夫だ』と考える。」のような設問5問と、認知的バイアスに関する設問として「自分は他人よりも優れていると考える。」のような設問5問に回答してもらう。

手続き：オンライン調査の形式で実施をした。メール等で説明用の資料を配布し、調査の目的と概要を説明した。説明用資料にはURLを記載し、調査の参加に同意する場合Googleフォームにアクセスをし、回答を送信してもらうよう依頼を行った。調査アンケートの回答以外の個人情報を入力せず、匿名で調査に参加できることを説明した。回答はGoogleフォームから送信してもらい回収した。

3.2 結果

防災・減災対策の自宅付近での避難場所について回答してもらった結果を図1にまとめた。

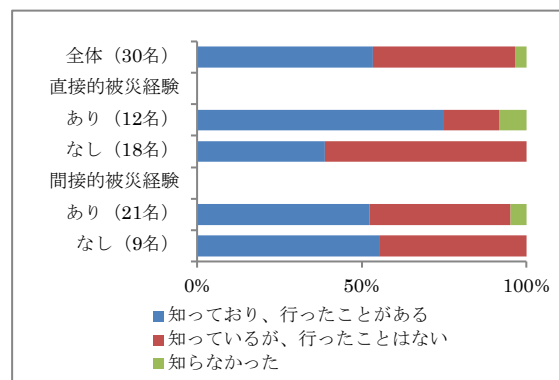


図1: 自宅付近の避難場所

直接的被災経験の有無による違いがあるかを χ^2 検定で分析したところ、有意な差が認められた($\chi^2(2) = 6.54, p < .05, \text{Cramer's } V = 0.47$)。

正常性バイアスに関する設問5問に回答してもらった結果の平均を図2にまとめた。

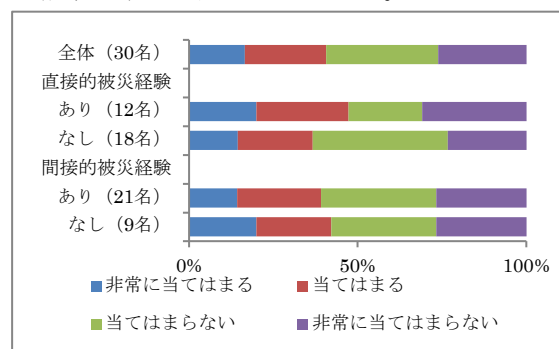


図2: 正常性バイアス

直接的被災経験がある人の方が正常性バイアスの影響を受けていたことがわかった。「地震が発生した時に『これくらいは普通だ』と考える。」の質問に対し、直接的被災経験のある人は「当てはまる」と回答した人が多かったが、それ以外の質問では相違は確認できなかった。

4. まとめ

防災・減災に向けた準備行動については、避難場所の確認といった一部の準備行動のみ影響が見られた。また、被災経験時における直接的/間接的被災経験がある人では、直接的被災経験がある人の方が正常性バイアスの影響を受けていることがわかった。

参考文献

Mika Yamamoto (2015). 正常性バイアスを知っていますか? 「自分は大丈夫」と思い込む脳の危険なメカニズム https://tenki.jp/suppl/m_yamamoto/2015/04/18/3081.html (2021年1月8日)